

と考えられた。しかし ^{123}I は右葉の腫瘍へ集積し、機能性腺腫の所見であった。剖検病理診断は、甲状腺左葉の硬化型乳頭癌と CEA 産生性肺腺癌(右 S⁶)の重複癌で甲状腺右葉の好酸性腺腫内、頸部リンパ節と頸椎にも CEA 産生性肺癌の転移が認められた。

5. 各種 HBs 抗原測定用キットにおける検出感度の検討

金森 勇雄 樋口 修 樋口ちづ子
(大垣市民病院・放技部)
熊田 卓 中野 哲 (同・消)

近年 HBs 抗原の検出用キットとして ICGA が市販された。この ICGA と RIA, EIA, RPHA との操作性と感度比較を行った。

1. 測定方法の対比

ICGA は RIA, EIA, RPHA に比し、測定に要する時間は短く、必要な血清量も $25\mu\text{l}$ と微量、操作性も簡易なる測定方法である。

2. 検出感度の対比

急性 B 型肝炎血清(24例)で RIA の検出感度を 100% とすると、EIA は 91.6%, ICGA は 79.2%, RPHA は 66.7% であった。

以上のごとく ICGA は RPHA に比し、検出感度、操作性にも優れることより、今後通用されるキットであると考える。

6. $^{99\text{m}}\text{Tc-GSA}$ 肝シンチグラフィによる小児経過観察例の検討

黒野 賢仁 石川 浩太 白木 法雄
北瀬 正則 宮川 英男 加藤 徹
玉木 恒男 遠山 淳子 大場 覚
(名古屋市大・放)

GSA 肝シンチグラフィを 2 回以上施行した 2 か月から 7 歳までの 7 例(胆道閉鎖症 4 例、乳児肝炎、ガラクトース血症による肝障害、Alagille 症候群各 1 例、2 例の移植例を含む)について形態、機能の経時的变化を検討した。いずれの症例においても肝の形態把握、脾腫の評価が経時的に可能であり、HH₁₅, LHL₁₅ の変化も、臨床的な肝機能の変化と一致した。特に、胆道閉鎖症では、肝門部胆管腸吻合術後に、肝腫大をきたし徐々に機能が悪化していく過程や、術直後より機能

が悪化している状態や、比較的良好な経過などを把握することが可能であり、胆道閉鎖症の病態をよく反映していると考えられた。小児肝疾患の経過観察にも有用な検査法であると考えられた。

7. 肺癌患者における $^{99\text{m}}\text{Tc-MAA}$ および $^{99\text{m}}\text{Tc-Technegas SPECT imaging}$ による術後呼吸機能予測

水野 晋二 今枝 孟義 兼松 雅之
浅田 修市 関 松藏 松井 英介
土井 健誉 (岐阜大・放)
酒井 聰 小久保光治 広瀬 一
(同・外一)

原発性肺癌 33 例の手術に際して、術前 $^{99\text{m}}\text{Tc-MAA}$ SPECT と胸部 CT を対応させることによって術後呼吸機能を予測し、実測値とよい相関が得られた。さらに一部の症例に $^{99\text{m}}\text{Tc-Technegas SPECT}$ でも術後呼吸機能を予測し、実測値とよい相関が得られた。両者を比較したが有意差はみられなかった。また $^{99\text{m}}\text{Tc-MAA SPECT}$ による術後 3 か月と 6 か月で有意差ではなく、肺血流の回復は術後約 3 か月で完了していると考えられた。

8. $^{99\text{m}}\text{Tc-ECD SPECT}$ の高血流領域における過小評価の補正について

土田 龍郎 山本 和高 石井 靖
(福井医大・放)
西澤 貞彦 (京大・核)
米倉 義晴 (同・脳病態生理)

$^{99\text{m}}\text{Tc-ECD}$ における高血流領域の過小評価の補正に Permeability-Surface Area (PS) product を考慮に入れた式を考案し、その妥当性について検討した。PET 検査には $^{15}\text{O-CO}_2$ steady state 法を用いた。ECD SPECT および PET 画像から対小脳比を求め、モデル式に代入し最小二乗法にて最適の補正係数を求めた。この式を 4 次関数で近似し、その逆関数に元の値を代入することにより補正を行った。補正前には、直線近似にて傾きが 0.76 であったものが補正後では 1.03 となり良好な補正が可能であった。今後、今回用いた補正係数の妥当性についても検討が必要と考えられた。